

(153) 栃木県今市市砥川上流の磁硫鉄鉱の転石一追記 砥川鉱山跡(?)の確認

今市ダムの湖岸道脇で若い岩友がヘデンベルグ石（灰鉄輝石、 $\text{CaFeSi}_2\text{O}_6$ ）を簡単に採集できたとのこと。また現時点で、「砥川鉱山跡」を全く確定できていないこと等から、岩友5人で今市ダム近傍の再探査に出かけた。

結果、先に岩友がヘデンベルグ石を採取した湖岸道の所の小さい沢上部に、坑口跡を3個確認した。坑道の大きさから、大いに採掘された坑道のように思われる。ここが主たる坑口であったのかは、確定しきれない、が「砥川鉱山」の「一部」であったと推断した。参考文献からは、坑口はあちこちにあったようであるので。ダム湖周りを時間をかけて探査を行えば、それなりの成果が得られると思う。「ダム湖」の渇水時が最適かもしれない。ともかく、坑口跡が確認できたことで一安心。

2021年3月



図1 ダムの突堤を渡り、トンネルを抜け、橋を渡った直ぐ先。赤輪の部分で坑口跡を確認した。この箇所を既報での場所の番号付け順からE点とする。岩友が先立ってヘデンベルグ石を確認した所でもある。湖岸道の対岸の記号「？」あたりに水面より少し上部に、黒い箇所を遠望した。坑口跡かもしれない、が湖水のため確認のための接近は無理。既報に添付した資料によれば、赤破線のような峠道があったと予想されるので、ダム湖の右岸にも坑口があったと推測できる。資料には幾つもの沢などの呼称名が記されている。現時点では殆どそれらの位置を確定できていない。どうかして確定したいものである。

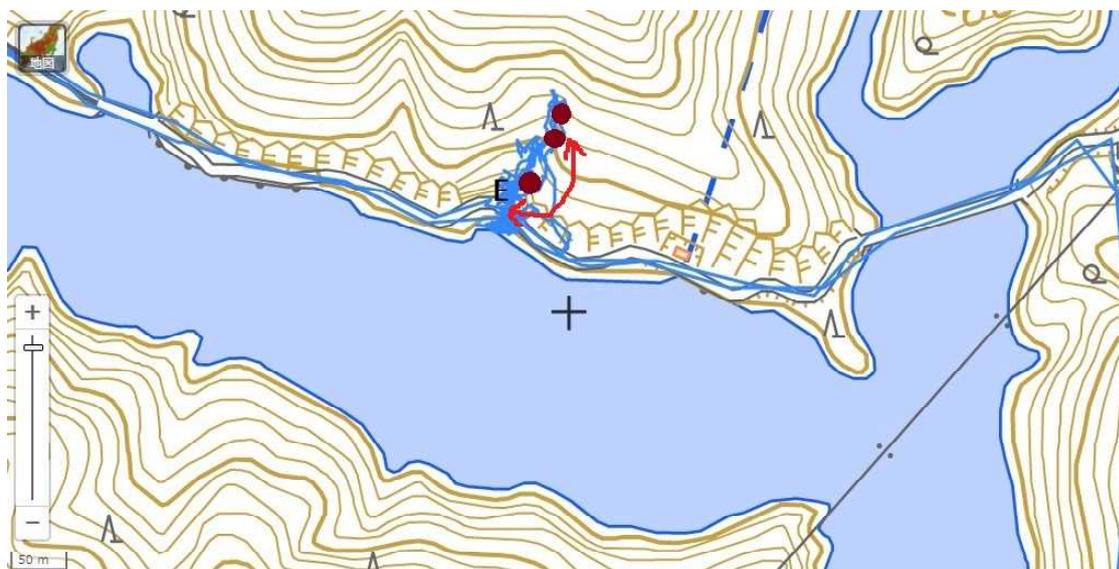


図2 図1の部分拡大図。E点には適当な広さの余地があり、駐車容易である。茶色丸が確認した坑口跡、3つ。ともにこの小沢（勾配は結構急）の左岸。沢の下方に1つ、その上方に連続して上下に2つ。赤矢印で上方の坑口跡への安全な迂回ルートを示している。



図3 40年以上前の現地の地形図。未だ今市ダム（着工1978年、竣工1988年）は無い。岩友が旧地形図中に、坑口のあった箇所を星印で記した地図中に、現在の今市ダムを黒台形で、そのダム湖水面をハッチパターンで加筆した。探查結果の評価のために作成した。坑口跡の多くは、ダム湖下にあったように思われる。なを、「左治沢」は「変電所」などがあり、関係者以外進入禁止となっている。

鉦山跡写真



写真1 E点の所の湖岸道から小さい沢を見上げている。急峻な沢である。赤輪の所が一番下の坑口跡。その近傍に岩友の姿も見えている。この上流に連続した2つの坑口跡もある。が、沢の直登は止めた方がよい。急な沢は登れたとしても、下の方が難しいからである。上の坑口跡に行くには、林道から沢に向かって、右手となる尾根上を巻くことを勧める。図2にその迂回ルートを示しておいた。



写真2 その坑口跡の入口から内部を覗く。坑道は大きく、奥は深そう。



写真3 写真1で示した坑口跡の更に上流の沢の左岸にあった上下2連の坑口跡。ここへは林道の所から、小沢に向かって右側の林の中をトラバース気味に背に出てから、背を登ることを勧める。図2中に、赤矢印線分でそのルートを示している。



写真4 その上の坑口から内部を覗く。



写真5 その下の坑口跡から内部を覗く。

採集鉱物



写真6 採集したヘデンベルグ石（灰鉄輝石、 $\text{CaFeSi}_2\text{O}_6$ ）。大きさ横12cm×縦12cm

(153) 栃木県今市市砥川上流の磁硫鉄鉱の転石

参考文献(1)を手引きに浅田水鉛銅山の内の「浅田銅山」の探査結果を本探査記の(152)項で既報である。この文献に「砥川鉱山」についての紹介があった。砥川上流に何カ所もの鉱床を有して、主に、鉛、亜鉛、銀を産出した。文献からの抜き刷りを文章1として後掲している。鬼怒川の支流である砥川の上流に位置している。文献によれば、鉱山の位置は「佐下部より砥川に入り、佐治沢と砥沢の合流付近」などの記述があった。残念ながら、未だにこれらの沢を特定できていないが、文献中でのその他の説明文などから「砥川鉱山」跡は、現在では揚水発電用「今市ダム」の建設に伴って水没してしまっただけではないかと推定している。しかし、何度かの今市ダム付近の探査において、大きくて良好な磁硫鉄鉱の標本を河床で容易に採集できていた。写真7, 8を参照。と言うことは、採集箇所の上流には良好な露天鉱床がある証拠でもある。上流の詳細な探査は未だ行ってはいないが、良好な標本を採集できたこと、上流に良好な露天鉱床の存在が推定できることから、探査結果を忘れてしまわないうちに、この時点で本探査記をまとめることとした。

現地への経路は次の通りである。今市当たりから砥川を目指す。砥川に沿った車道を今市ダム目掛けて北上していく。ダムの突堤を通り、ダムの左岸に延びている車道を進んで行くが、途中から舗装道路は終わり、砂利道となる。が十分に安心して、先に進んでいける。そのうちに、ダム湖の最上流端付近で道は終了する。そこに駐車するとよい。図1、図2参照。

なを、文献によれば、砥川鉱山の産出鉱物は主に方鉛鉱、閃亜鉛鉱、銀とのこと。磁硫鉄鉱については何の記述もない。本探査記を手引きに、今市ダムの周りの各沢での転石確認、或いは現地上流を探査するのもよいであろうが、呉々も安全に留意することを怠らずに。

探査日 2017年9月、10月

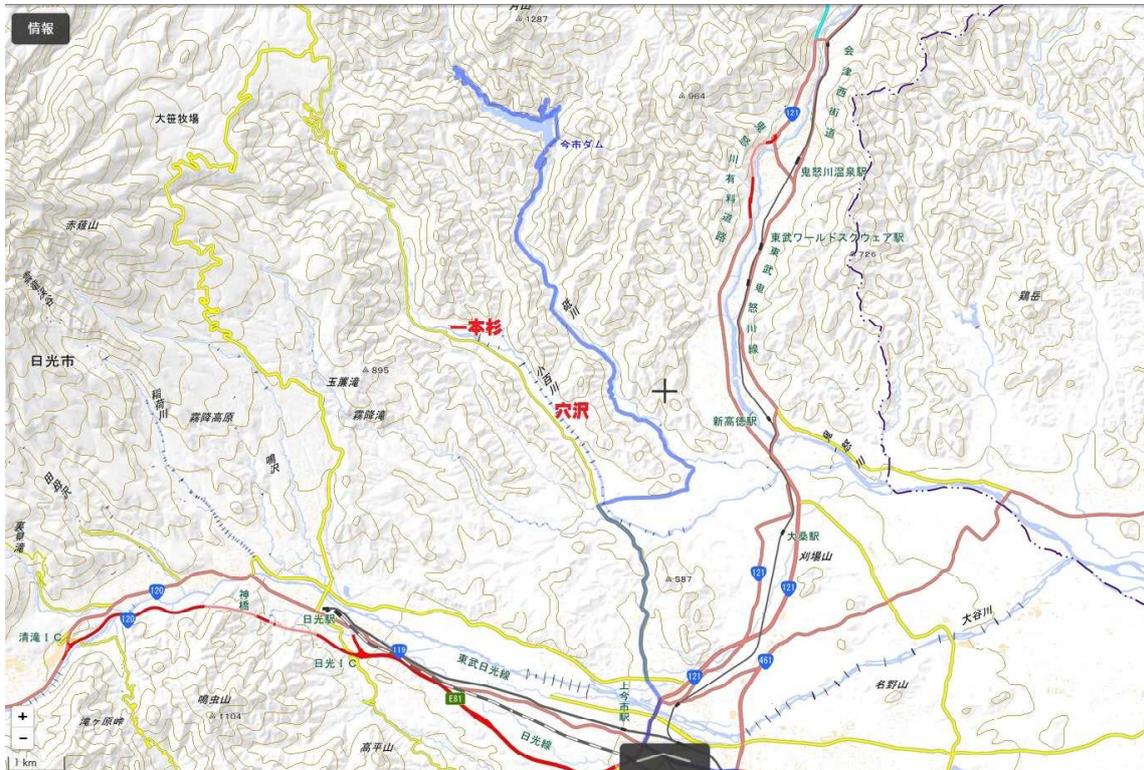


図1 今市から砥川に沿って北上し、今市ダムの最上流まで、GPSガーミンで得られた経路ログを水色で示している。砥川沿いの道は今市ダムの先まで、立派な舗装道路である。121号から砥川に入る他の経路もある。道路地図を参照するとよい。なを、付加知識。今市ダムは上流にある栗山ダムと一緒に、揚水式発電所を形成している。

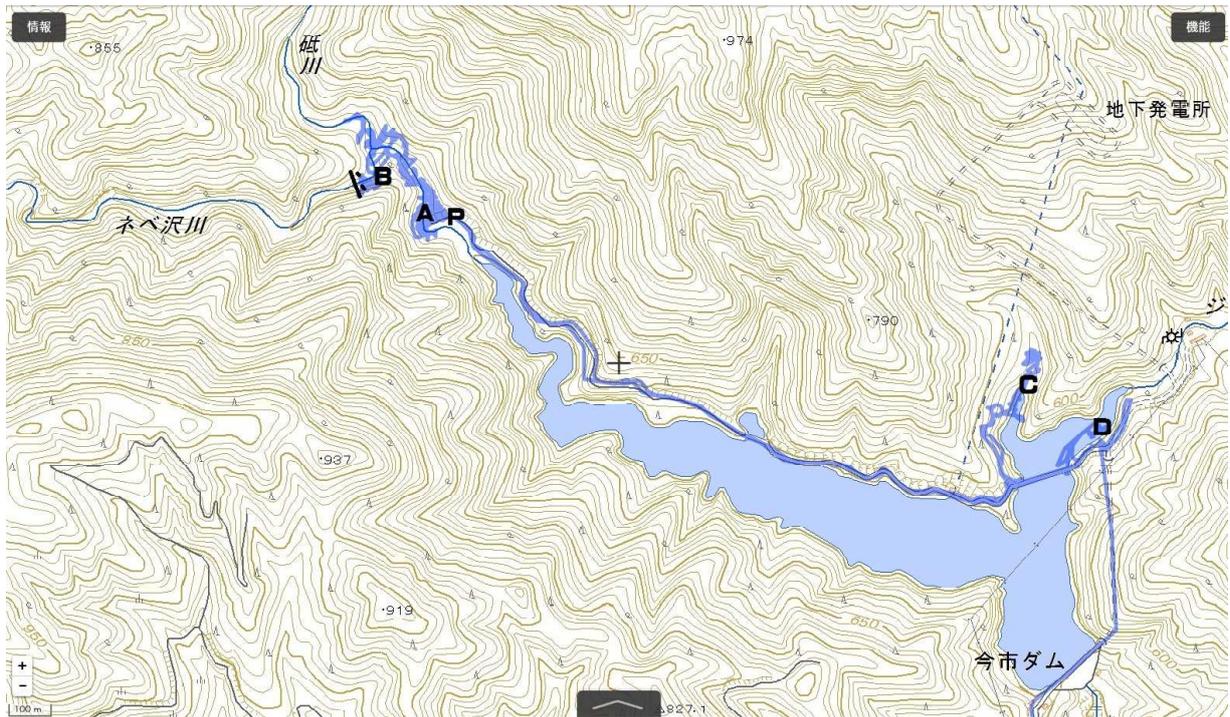


図2 図1に示したGPSログの上部分の拡大図。ダム湖最上流のP点は車を駐車した場所。ここまで何の不安なく車で進んでこられる。A点は河床で、ここで良好な転石標本を簡単に採集できた。ネベ沢川入口付近でも鉱物転石を確認した。B点である。その前方には結構落差のある滝があった。図中にも書き加えている。その他に、ダム湖下流のC、D付近の沢で鉱物転石を探したが、見つけられず。なを、C点、D点の探査時にはダム湖の水量が少なかったのであろう、広い河床が露出していた時である。

砥川上流写真



写真1 ダム道終端である。図2中のP点である。前方に歩いて行けば、そのまま沢に入れる。右側の階段は、上流にあるダム施設への特設道のためのもの。階段を上っていくと直に沢に入る。



写真2 図2中のA点である。広い河床である。この当たりで鉱物転石を簡単に見つけた。



写真3 A点から少し上流。左側に無人のダム施設がある。先ほどの階段道は、ここに続いていたようである。



写真4 更に、沢の少し上流。沢幅が狭まり、小さいゴルジェとなっている。両岸にダム関連機器が設置されている。探査時には、水量が少なかったのか、間を簡単に通り抜けることができた。その先は二俣となっている。水量が多い時には、右側の斜面を巻けばよいであろう。



写真5 二俣の左側沢（図2中のネベ沢川）を少し遡上した先にあった落差5m程の滝。ここで前進を断念。が、この当たりでも磁硫鉄鉱豊富な転石を見つけた。未採集。写真だけ。滝の上流は未探査。



写真6 二俣の右側沢（図2中の砥川）の様子。靴では、この箇所の河床は進めそうはなかったのに、左岸斜面を上流に進んだ。が、斜面は結構急であり、下に見る河床も歩けそうもなかったのに、前進を直ぐ諦める。

採集鉱物



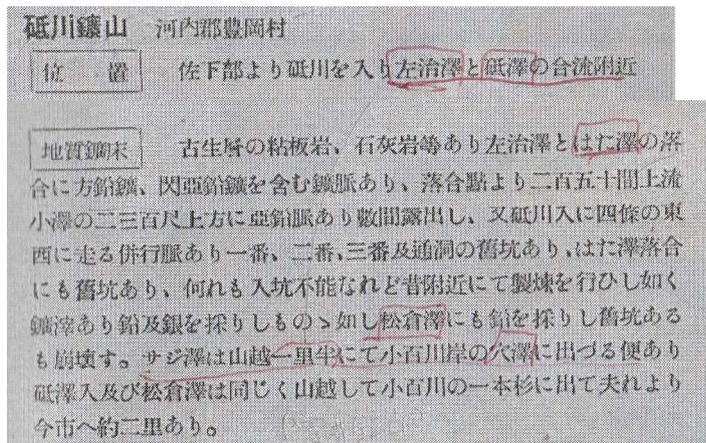
写真7 A点で採集。中央付近で破断面を見せている3つがハンマーで打ち砕いた磁硫鉄鉱豊富な転石。



写真8 同じく、A点で採集。中央付近で破断面を見せている大小2つがハンマーで打ち砕いた磁硫鉄鉱豊富な転石。写真7, 8で示している2つの転石を見つけるのに、沢に入ってから5分も経っていなかった。結論、この沢にはこのような転石は結構ある。そして、この上流には、しっかりした露頭鉄脈があるのであろう。

参考文献

(1)「東京鉱山監督局管内 金属鉱山（鉱業叢書第三編）」、小山一郎、鉱業社、昭和15年。



文章1 参考文献(1)中の砥川鉦山に関する紹介文である。著者は、砥川鉦山に関する資料は、これだけしか有していない。これを手引きに、現地の探査を行ったわけである。文章中に幾つもの沢名が記述されているが、手持ちの現旧の地形図には記載がない。

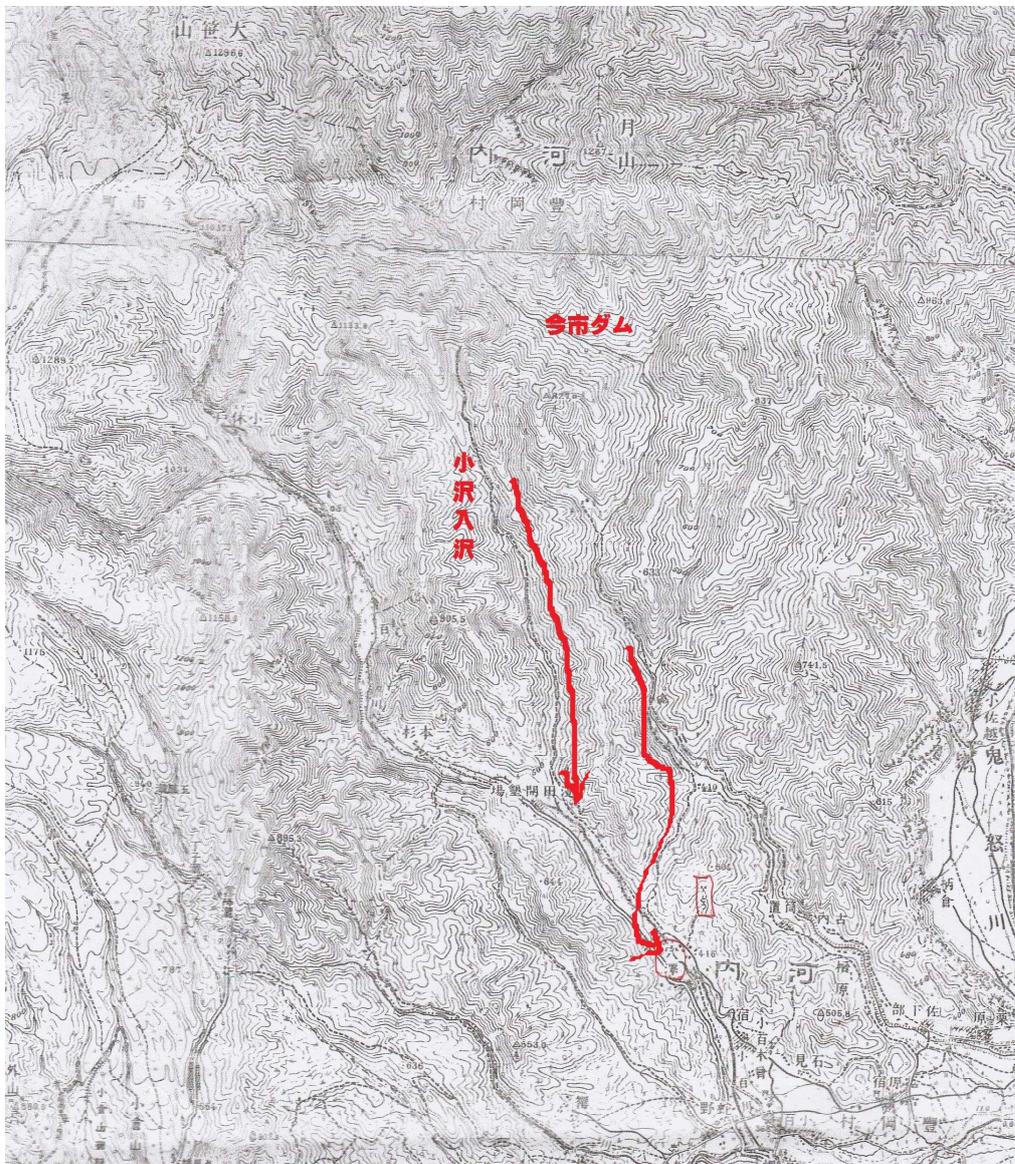


図3 現地付近の古い地形図。最新の地形図は国土地理院のホームページに入って、閲覧でき、コピーもできる。では古い昔の地形図は？ 国土地理院に保管されており、筑波の本院の閲覧室で参照できる。有料で印刷もできる。文章1から推断した、勝手に2経路の鉦山道を赤線で描いている。右

側の赤線の上流は今市ダムに行き着く。左側の赤線は山越えして、今市ダムの上流部に辿り着く。

解説 文献（1）によれば、砥川上流の多くの箇所には鉱床があった。鉱床のあるサジ沢について「・ ・ ・サジ沢は山越え一里半にて小百川岸の穴沢に出ずる・ ・ ・」とある。今市ダムの下流の砥川から穴沢への林道が明記されている。この林道のことを語っているものであろう。穴沢から一里半の距離という、現在の今市ダム付近となる。また文献中には、他の鉱床のありそうな沢について「・ ・ ・砥沢入及び松倉沢は同じく山越えして小百川の一本杉に出てそれより今市へ・ ・ ・」とある。一本杉と砥川上流を結ぶ道が図3に明記されている。最新の地形図では「小沢入沢」に沿った道である。この道を遡って、山越えすると、現在の今市ダムの上流当たりとなる。つまり、この付近に鉱床があったことになる。A点。B点付近で鉱物転石を採集できたのは、その証拠となる。この付近をじっくり探査することは面白い。